

人の子による「大イスラエル」の復興？

—— マタイ福音書10,23の釈義試論 ——

須 藤 伊知郎

マタイによる福音書10,23はこの福音書の中でも解釈が最も困難な箇所の一つである。Albert Schweitzer はここから史的イエスはいわゆる「徹底的な終末論」を考えていたと主張した¹。彼の解釈は、マタイ10章が編集によって構成された複合体であることを顧慮していないので、そのまま採用することはできない。しかし、マタイ10,23の発言の衝撃性を発見した彼の功績は残る。以下ではまずこの箇所に関する従来の解釈を概観した後、この発言をマタイ共同体の現在にとっても妥当するものと解釈できる三つの可能性を検討してみたい²。

1 Albert Schweitzer, Von Reimarus zu Wrede. Eine Geschichte der Leben-Jesu-Forschung, Tübingen 1906, 347–397. 356 (=ders., Geschichte der Leben-Jesu-Forschung, Tübingen⁹1984 (UTB 1302=Nachdruck der 7. Aufl.), 390–443. 407) を参照。

2 マタイ 10,23 の伝承史については、この節の前半と後半がそもそも一体のものであったのか、そしてこの節が史的イエスに遡るかどうかが、という問題があるが、これについては稿を改めて論じる予定であり、本稿ではマタイ福音書の最終テキストの解釈に集中する。伝承史的問題に関する筆者の結論のみを記せば、この節の前半と後半は一体のものであり (V. Hampel, „Ihr werdet mit den Städten Israels nicht zu Ende kommen“. Eine exegetische Studie über Matthäus 10,23, ThZ 45 (1989) 1–31.8–10; U. Luz, Das Evangelium nach Matthäus (Mt 8–17), EKK I/2, Düsseldorf/Neukirchen-Vluyn/Zürich⁴2007, 106 f.に賛成、23 節前半は 23 節後半に後から加えられたとする E. Gräßer, Das Problem der Parusieverzögerung in den synoptischen Evangelien und in der Apostelgeschichte, BZNW 22, Berlin 1960, 137–141.137; W. G. Kümmel, Die Naherwartung in der Verkündigung Jesu, in: ders., Heilsgeschehen und Geschichte, MThS 3, Marburg 1965, 457–470.466 には反対)、おそらく福音書記者が受け取った Q (Q^{Mt}) の中にあり (Luz 2,106 に賛成、Q で Lk 12,11 f.に続いていたとする H. Schürmann, Zur Traditions- und Redaktionsgeschichte von Mt 10,23, in: ders.,

I

マタイ10,23は普通、以下のように訳される。「また人々があなたたちをこの町で迫害する時は、ほかの町へ逃げよ。アーメン、私はあなたたちに言う、人の子がやって来る前に、あなたたちがイスラエルの町々をまわり終えることは決してないであろう。」(岩波版佐藤研訳)³

τελέσητε τὰς πόλεις τοῦ Ἰσραὴλ という帰結節は通常省略語法と解され、1) τελέσητε φεύγοντες ἐν ταῖς πόλεσιν τοῦ Ἰσραὴλ⁴あるいは2) τελέσητε τὰ ἔργα ὑμῶν ἐν ταῖς πόλεσιν τοῦ Ἰσραὴλ⁵を短くしたものと取

Traditionsgeschichtliche Untersuchungen zu den synoptischen Evangelien, KBANT, Düsseldorf 1968, 150-156.152 およびマタイないし彼の学派の編集句とする J. Gnilka, Das Matthäusevangelium I. Teil. Kommentar zu Kap. 1,1-13,58, ³1993, 374 には反対)、史的イエスに遡る可能性がある (Hampel, Studie 26, Luz 2,108 に賛成、ただし後者はより慎重)。なお、10,23 に呼応するイスラエル中心の派遣の言葉 10,5 f. と、それと一見真っ向から対立する普遍的な派遣の言葉 28,19 f. の関係については拙論、「マタイ福音書における ἔθνος - 28 章 19 節の πάντα τὰ ἔθνη はイスラエルを含むか - 」「新約学研究」34 (2006) 5-18 を参照。

3 新共同訳 (口語訳もほぼ同) が 23 節後半を「あなたがたがイスラエルの町を回り終わらないうちに、人の子は来る」と訳しているのは意訳。なお、Luther Bibel '84; Einheitsübersetzung; Zürcher Bibel 2007; King James Version; New Revised Standard Version; New International Version; Traduction œcuménique de la Bible 等、主要な独英仏語訳も同旨である。

4 BDAG, s.v. τελέω 1 を参照: 「ある行為ないし過程を完結する、終わりにもたらす、終える、完成する」。マタイは τελεῖν のこの意味を説教段落の結びの言い回しに用いている: マタ 7,28; 11,1; 13,53; 19,1; 26,1。11,1 の分詞構文 ὅτε ἐτέλεσεν ὁ Ἰησοῦς διατάσσων については Bl.-D. § 414,2 Anm.10 を参照: 「分詞を伴う τελεῖν は非古典的」。

5 BDAG, s.v. τελέω 2 を参照: 「ある義務ないし要求を遂行する、実行する、達成する、遂行する、成就する、果たす」。目的語に τὸ ἔργον を伴う例としては Herm sim V 2,7 を参照。七十人訳では τελεῖν とほぼ同義に用いられる συντελεῖν はさまざまなニュアンスで目的語に τὰ ἔργα を取ることができる: 創 2,2 (創造の業の完成); 出 40,33 (会見の幕屋の完成と奉獻); 5,13 (エジプトにおける奴隷労働)。これらの 3 箇所用例ではマソラ本文の כָּלל פִּיֶּלר 「総体 (כָּל) にもたらす」を七十人訳が (συν) τελεῖν 「(すっかり) 終結 (τέλος) にもたらす」と訳している。さらに 1 マカ 4,51 を参照。レビ 19,9 (ほとんど同じ言葉遣いで 23,22) では τὸν θερισμόν が כָּלל פִּיֶּלr / συντελεῖν の目的語である。マタ 9,37b (ὁ μὲν θερισμὸς πολὺς, οἱ δὲ ἔργαται ὀλίγοι) からすると 10,23b は τελέσητε τὸν θερισμόν ὑμῶν ἐν ταῖς πόλεσιν τοῦ Ἰσραὴλ の省略であるかもしれない。省略語法を補う次の候補としては ἐντολήないし διακονία が考えられる。

られている。イエスに派遣された弟子たちが再臨まで常に1) 逃げながら、そして／あるいは2) 宣教しながらイスラエルの町々を廻り続けるであろう、という意味にこの発言を理解し、その際、「イスラエルの町々」という表現を地理的に「イスラエルの地にある町々」と取るならば、我々は解釈上大変困難な隘路に陥ることとなる。すなわち、この発言は福音書記者の時点においては、通常考えられている意味でのイスラエルの地における宣教はすでに全体として失敗に終わっていたのであり、それにもかかわらず人の子は未だ到来していなかったのであるから、端的に「間違っている」⁶⁾と言わざるを得ない。

しかしこのマタ10,23が「間違っている」という想定は、極めて綿密な編集作業を行っている福音書記者にはそぐわない。そこで10,23の言葉を妥当であり続けるものと捉えるために様々な試みがなされてきている。その場合、1) 人の子の到来、あるいは2) イスラエルの町々、を再解釈することとなる。

1) 人の子の到来を、イエスが彼の死以前に彼に派遣されて宣教活動を行っている弟子たちの所へ来ること⁷⁾、あるいは、イエスの復活⁸⁾、聖霊の派遣⁹⁾、はたまたエルサレムの破壊¹⁰⁾、等々と解釈する試みがあるが、いずれも説得的ではない¹¹⁾。人の子の到来は再臨を意味すると取るのが最も自然な解釈で

6 Luz 2,117.同 116 参照：「人の子の到来によってではなく、復活者の異邦人たちの許へ行けとの命令によってイスラエルにおける教会の宣教と迫害は終結した」。さらに W. D. Davies/D. C. Allison, Jr., *A Critical and Exegetical Commentary on the Gospel According to Saint Matthew* vol. 2, Edinburgh 1991, 190 をも参照：「この解釈に対する主な反論は、それが一見したところマタイのイエスを偽預言者にしてしまうということである」。

7 Chrysostomos, hom. in Mt 34,1 (PG 57,397); J. Dupont, “Vous n’aurez pas achevé les villes d’Israël avant que le Fils de l’homme ne vienne” (Mat. X 23), NT 2 (1958) 228–244.

8 A.-J. Levine, *The Social and Ethnic Dimensions of Matthean Salvation History*: “Go nowhere among the Gentiles...” (Matt.10:5 b), SBEC 14, Lewiston/Queenston/Lampeter 1988, 51; Hampel, *Studie* (上掲注 2) 27 f.; R. T. France, *The Gospel of Matthew*, NICNT, Grand Rapids 2007, 396–398; さらに K. Barth, *Kirchliche Dogmatik* III/2, Zürich ³1974, 601 参照。

9 Calvin, *Commentarius in Harmoniam evangelicam*, CR 73, Braunschweig 1891, 284 f. (apud M. Künzi, *Das Naherwartungslogion Matthäus 10,23. Geschichte seiner Auslegung*, BGBE 9, Tübingen 1970, 56 f.).

ある(24, 27.30参照)。

2) イスラエルの町々は、属人的に人を中心に考えるならば、ディアスポラのユダヤ人が居住している町々と解釈することもできる¹²。しかし「イスラエルの町々」という表現における「イスラエル」の語は、地理的な意味に取るのが最も自然である¹³。2, 20f. には「イスラエルの地」という地理的な表現があるし、10, 23に直近の文脈で10, 5に出て来る「サマリア人の町」という表現は、明らかに「サマリア人が住んでいる町」ではなく、「サマリアの領域にある町」を意味している¹⁴。

だが、もし我々がこの10, 23の「イスラエルの町々」という表現を地理的に取るならば、この一節はマタイ福音書全体の構想に合致しなくなる。福音書の構想では弟子たちの宣教の場は復活節後に全世界に拡大しているのである(28, 19)。

10 Bullinger, In sacrosanctum Jesu Christi D. N. Evangelium sec. Matth. Comm. Lib. XII, Tiguri 1542, 102 (apud Künzi, Naherwartungslogion (上掲注 9) 55 f.); D. A. Hagner, Matthew 1–13, WBC 33A, Dallas 1993, 280.

11 以上、解釈史における様々な再解釈の試みについて詳しくは Künzi, Naherwartungslogion (上掲注 9); Luz 2, 115 f.; Davies/Allison 2, 190; E. J. Schnabel, Urchristliche Mission, Wuppertal 2002, 300–302 を参照。

12 そう考えるのが、G. D. Kilpatrick, The Origins of the Gospel according to St. Matthew, Oxford 1946, 119; G. Strecker, Der Weg der Gerechtigkeit. Untersuchung zur Theologie des Matthäus, FRLANT 82, Göttingen ³1971, 41 f.; E. Schweizer, Das Evangelium nach Matthäus, NTD 2, Göttingen ¹⁶1986, 158; Gnika 1 (上掲注 2) 379; H. Frankemölle, Matthäus: Kommentar II, Düsseldorf ²1999, 84 f.; G. Garbe, Der Hirte Israels. Eine Untersuchung zur Israeltheologie des Matthäusevangeliums, WMANT 106, Neukirchen-Vluyn 2005, 147; M. Konrad, Israel, Kirche und die Völker im Matthäusevangelium, WUNT 215, Tübingen 2007, 90.

13 地理的に解釈しているのは例えば以下の釈義家たちである: J. Schniewind, Das Evangelium nach Matthäus, NTD 2, Göttingen ¹²1968, 130 f.; F. Hahn, Das Verständnis der Mission im Neuen Testament, WMANT 13, Neukirchen-Vluyn 1963, 44 f.; Künzi, Naherwartungslogion (上掲注 9) 178; E. Schweizer, Matthäus und seine Gemeinde, SBS 71, Stuttgart 1974, 32; Levine, Dimensions (上掲注 8) 51; G. Tisera, Universalism according to the Gospel of Matthew, EHS 23/426, Frankfurt a.M. 1993, 154 f.; C. S. Keener, A Commentary on the Gospel of Matthew, Grand Rapids 1999, 324; F. Wilk, Jesus und die Völker in der Sicht der Synoptiker, BZNW 109, Berlin 2002, 125, Anm.325; J. Nolland, The Gospel of Matthew, NIGTC, Grand Rapids 2005, 427; France (上掲注 8) 184. この点を未決定のままにしているのが Davies/Allison, 2 (上掲注 6) 191; P. Fiedler, Das Matthäusevangelium, ThKNT 1, Stuttgart 2006, 232, Anm.18 である。

II

私見では、人の子の到来を再臨と取り、「イスラエル」を地理的に捉えるという条件の下でなお、マタ10,23の発言をマタイ共同体の状況に当てはまるものと解釈する可能性が、少なくとも二つある。以下の二つの可能性は必ずしも互いを排除するものではない。

1) 任務を完成するのは人の子

10,23後半は文字通りに訳すと、「あなた方はイスラエルの町々（すなわち、イスラエルの地の居住地）を決して終結にもたらさないであろう、人の子が来るまで」となる。もしこの言葉を以下の意味に取るなら、この一文は福音書記者の現在にも妥当する。すなわち言外に含意されているのは、「だが、もし人の子が来たならば、その時には彼と、そして彼と共にあなた方もまた、終末の完成という枠組みの中で、イスラエルの町々を終結にもたらすであろう¹⁵。たとえあなた方がいくつかの町々で成果を上げないようなことがある

14 同じ 10,5 の「イスラエルの家の失われてしまっている羊たち」という表現ではイスラエルの民が地理的ではなく属人的に把握されている。これはあるいは「失われた九部族半」を意味しているのだろうか？最近 J. Willitts, *Matthew's Messianic Shepherd-King. In Search of 'The Lost Sheep of the House of Israel'*, BZNW 147, Berlin/New York 2007 が 10,5 のこの表現に関する単行論文を発表し、10,23 の「イスラエル」は失われた「北王国」を指すと主張している (199)。しかしこの Willitts の解釈では、10,23 の言葉は史的イエスのガリラヤ宣教の状況には合致させることができて、シリアにあるマタイ共同体の状況には妥当しない、という問題がやはり残る。もっとも Willitts 自身はマタイ福音書の執筆年代および執筆地を 70 年以前のパレスティナの可能性があるとしているので (同書 35)、彼にとってはこの問題は存在しない。だが、エレ 50,6 からすると、この表現はイスラエル内部で指導者層との対比で民衆を意味している。これは、羊飼いと羊の隠喩を用いて指導者層を批判する預言者の伝統を意識的に受け継いでいる表現と見るべきであろう。また、G. Theißen, *Lokalkolorit und Zeitgeschichte in den Evangelien. Ein Beitrag zur Geschichte der synoptischen Tradition*, NTOA 8, Freiburg/Göttingen 1989, 59 は散らされた部族をもディアスポラから集めることが語られていると考えるが、10,5 f. との明らかな関連から見て、マタイが地上のイエスにディアスポラでのイスラエル伝道を語らせているとは考え難い。

15 10,22 εἰς τέλος ; 24,14 καὶ τότε ἤξει τὸ τέλος ; 28,20 ἕως τῆς συντελείας τοῦ αἰῶνος ; Lk 12,50 ἕως οὗτου τελεσθῆναι を参照。

うとも、そしてあなた方の宣教の業を完成することができないとしても、人の子が最後にはすべての町々を『完成』するであろう」ということである。これは慰めの言葉であり、完成を睨んで弟子たちを途上の存在と規定するものである。つまり、散らされている十二部族の民を集めることは、人の子の到来と共に始めて完成されるであろう¹⁶。ここではイスラエルの復興が、人の子の到来に言及することによって普遍的な世の完成に統合されている。19, 28でもイスラエルの復興は普遍的な *παλιγγενεσία* に組み入れられている。

10, 23c.d と 19, 28c.d を並行させて読むと、一方で 10, 23d と 19, 28c、他方で 10, 23c と 19, 28d が対応し、その際、19, 28c.d は王座のモチーフでより詳細に展開されていることが分かる。

- 10, 23c : οὐ μὴ τελέσητε τὰς πόλεις τοῦ Ἰσραὴλ
- 10, 23d : ἕως ἂν ἔλθῃ ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου.
- 19, 28c : ὅταν καθίσῃ ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου
ἐπὶ θρόνου δόξης αὐτοῦ,
- 19, 28d : καθήσθε καὶ ὑμεῖς ἐπὶ δώδεκα θρόνους
κρίνοντες τὰς δώδεκα φυλὰς τοῦ Ἰσραὴλ.

10, 23 と 19, 28 (さらに 23, 39) は同一の出来事、すなわち、人の子の到来と十二部族の民イスラエルの完成に関わる発言である。十二人は十二部族の象徴であり、その十二部族を包摂するダビデの王国はイスラエル復興の象徴である。

イスラエルの復興はイエス自身が派遣された任務であった¹⁷。この任務に彼は弟子たちを参与させた。つまり、弟子たちの任務はイエスのものと同じである。この任務がイエスの生前には、初めのうちこそガリラヤで成功するかに見えたが、最後には結局エルサレムで頓挫し、復活節後の弟子たちのイスラエルの地における宣教活動もまた全体としては失敗に終わったというこ

16 28, 20 の συντέλεια を参照。

17 イエスの系図 (マタ 1, 1-17) でマタイは以下の図式を提示している：1) アブラハムから「王」ダビデまでの上昇；2) ダビデから捕囚までの下降；3) 捕囚から「キリスト」までの上昇 (1, 17)。この上昇、下降、そして再び上昇という動きは、完成という目標がイエス・キリストにおいて到達されることを暗示している。

とを、福音書記者は知っていた。しかし、まさに10,23の発言はこの状況を説明する。弟子たちはイスラエルの町々を完成しないであろう！ 彼ら／彼女らはイスラエル復興のための宣教の業を終結にもたらしはしないであろう¹⁸。そのように読むならば、この23節後半 Ἰσραήλ までの発言は事後預言である。しかし、23節の末尾 ἕως ἄν 以降は真の預言である。「人の子が来るまで」すなわち、再臨まで、というのである。たとえ彼ら／彼女らのイスラエルの地における業が失敗に終わったとしても、人の子が時の終わりに再びやって来て、十二部族の民を完成するであろう。つまりイスラエル復興の任務は人の子が初めて完成するのである。十二部族の民の復興は天の国の実現と並行するのであるから、後者と同様、継続的に進行するものではない。完成は人の子の到来と共に突然やって来る。

2) 理念的な「大イスラエル」はシリアを含む

マタイ10,23がイスラエルの復興を睨んだ発言であるということが正しいとすると、この一節をマタイの現在においても妥当するものと説明できる、さらにもう一つの解釈の可能性がある。復興されるべき理念的な「大イスラエル」にはシリアの領域も属するものと考えられていた可能性がある¹⁹。サム下8,3-12では、ダビデがシリア南部を征服したことが語られている：「ダビデはまた、ツォバの〔アラムの〕王、レホブの子ハグドエゼルが〔ユーフラテス〕河〔流域〕にその勢力を回復しようと出かけたとき、これを討った。

18 これに対して類比となるのがマタ 17,14 以下の事態である。すなわち、弟子たちは悪霊に憑かれた子どもの癒しに失敗したのだが、その後にイエスがやって来て、その子どもを癒した。病人の癒しはイエスにとっても (4,23 ; 9,35) 弟子たちにとっても (10,7 f.) イスラエル復興の任務に属している。

19 以下については M. Hengel, Ἰουδαία in der Liste Apg 2,9-11 und Syrien als “Großjudäa”, RHPbR 80 (2000) 51-68, 58-66; S. Freyne, The Geography of Restoration : Galilee-Jerusalem Relations in Early Jewish and Christian Experience, NTS 47 (2001) 289-311, 292-297 を参照。Theißen, Lokalkolorit (上掲注 14) 59 は、マタイが 10,23 の「イスラエル」で考えている領域はパレスティナより広く、シリア全体を含んでいた可能性があることを指摘しているが、その根拠としては「ラビたちは *erez jisrael* をこの広義で定義することができた」と述べて、O. Keel/M. Küchler : Orte und Landschaften in der Bibel, Bd.I, Göttingen/Zürich 1982, 262-268 を参照しているのみである。

…ダマスコのアラム〔の軍〕がツォバの王ハダドエゼルの救援に来たが、ダビデはそのアラム〔人〕二万二千を討った。ダビデは、ダマスコのアラムに守備隊を置いた。こうしてアラムはダビデに隷属し、貢を納めるものとなった。…ハマトの王トイは、ダビデがハダドエゼルの全軍勢を打ち破ったことを聞いた。そこでトイは、その息子のヨラムをダビデ王のもとに遣わし…ヨラムは、銀、金、青銅の品々を携えて来た。』²⁰それを引き継いで、エゼ47, 15-20では、復興されるべき十二部族の民イスラエルの境界線が叙述されるのであるが、それは北端と東端でシリアの領域を横断している：「これはこの地の境界である。北端では、大海からヘトロノ街道、レボ・ハマト、ツェダド、ベロト、ダマスコの領地とハマトの領地の間にあるシブライム、ハウランの領地に接するハツェル・ティコン〔に至る〕。境界は海からハツェル・エノン——ダマスコとの北方の境界——、〔さらに〕北方、ハマトとの境界〔に至る〕。これが北端〔の境界〕である。東端はハウランとダマスコとの間〔のハツェル・エノン〕から、ギルアドとイスラエルの地の間、すなわちヨルダン〔河〕、さらにその東の海に境界を伸ばし、タマルに〔至る〕。これが東端〔の境界〕である。南端は南方、タマルからメリバト・カデシュの水まで、大海に向かう川〔まで〕である。これが真南の南端である。西端は大海であり、レボ・ハマトの差し向かいにまで境界を伸ばす。これが西端である。」²¹ハスモン王朝の宮廷歴史家であったエウポレーモスは、同様にダビデのシリア征圧を描いている：「それから…ダビデが支配したが、彼はユーフラテス河沿いに住んでいるシリア人たち…を踏み倒した」²²。他方、クムラン出土のいわゆる創世記アポクリュフォンは第21欄15-19行で創13, 14-18のアブラハムに約束された領域を描いており、彼はその領域を行き巡るのであるが、その北東の境界線はユーフラテス河に沿って走っている：「そして私は歩んだ、牡牛の山〔タウルス山脈〕の麓に沿って、東に向かって、広い地に向かって、ユーフラテス河に着くまで(עד די דבקת לפורת נהרא)」²³。

20 サム下 8,3.5-6a.9.10init.10fin. (岩波版池田裕訳)

21 エゼ 47,15-20 (岩波版月本昭男訳)。

22 εἴτα Δαβὶδ ... δυναστεύσαι, ὃν καταστρέψασθαι Σύρους τοὺς παρὰ τὸν Εὐφράτην οἰκοῦντας ποταμόν ..., apud Eusebius, Praeparatio evangelica IX 30,3.

そもそも「(…から) ユーフラテス河まで」は申命記史家的な表現で、イスラエルに与えられる地の境界を示しているのである²⁴。

多くの註解者たちが指摘しているように、マタイ福音書の受容史はシリアにおいて特に集中していること、そこでペテロの権威が高く評価されていたこと、そしてマタ4,24に唐突に「シリア」の名が現れること等、からこの福音書はそこで成立したと考えるのが最も自然である²⁵。

W. Trilling はマタ4,25の地理的表示を福音書記者が手本としたマコ3,7f. と比較してその編集作業を検討し、ここでマタイが列挙している地名は聖書的なイスラエルの領域をカバーしている、と主張する²⁶。しかし、シリアも上述の例証が示しているように、理念的な「大イスラエル」に属している可能性があり、もしマタイがこの大イスラエル構想を持っていたとすると、4,25のみでなく、その直前の4,24のシリアに関する叙述も含めて、4,23-25の要約的報告全体が大イスラエルを包摂するように書かれているものと思われる。マタイはおそらくシリアを理念的な大イスラエルに含まれているものとして叙述したのである。しかしイエス自身は生前シリアに足を踏み入れたことはなく、そこから群衆が彼の許に集まってきたということもなかった。この事実を福音書の最初の読者たちも（そしてたぶんマタイ共同体の敵対者たちも）よく知っている。そこで彼は、逆にイエスの噂がそこに到達することにする。そうして大イスラエルの全体にイエスの影響が及んだことになるのである。

23 1Q20 XXI, 16b-17 init.

24 創 15,18 ; 出 23,31 ; 申 1,7 ; 11,24 ; ヨシ 1,4。これらのうち最初の典拠のみアブラハムに対する契約で、それ以外はモーセを通してイスラエルの民に与えられた約束。さらにゼカ 9,10 ; ミカ 7,12 をも参照。さらにベン・シラ 44,21 ではアブラハムに約束された地がやはり「海から海まで、そして河から地の果てまで」と描かれている。

25 U. Luz, Das Evangelium nach Matthäus (Mt 1-7), EKK I/1, Düsseldorf/Neukirchen-Vluyn/Zürich ⁵2002, 100-103; W. D. Davies/D. C. Allison, Jr., A Critical and Exegetical Commentary on the Gospel According to Saint Matthew vol. 1, Edinburgh 2004, 138-147 参照。

26 W. Trilling, Das wahre Israel. Studien zur Theologie des Matthäus-Evangeliums, StANT 10, München ³1964, 135f.

このように解釈すれば、マタイ共同体から派遣された弟子たちは、本来この大イスラエルに属すべき諸都市でさらに宣教を続けていることになる。イスラエル伝道と異邦人伝道はシリアの領域で完全に並行して進行している。そこは現実的政治的にはローマの属州シリアに属しているが、イデオロギー的には理念的な大イスラエルに属しているのである。弟子たちは従前通りさらに「イスラエルの町々」で宣教活動が続けており、そこで異邦人にも出会っている。10, 16-22で描かれる迫害の状況は、ユダヤ人会堂とローマの官憲がイエスの弟子たちに敵対して並び立っているが、それはおそらくこのような事態を反映しているものと思われる。イデオロギー的な大イスラエルの考えはシリア人たちとローマの権力者たちを警戒させ、防衛的な反応を惹き起こした可能性がある²⁷。「あなた方はすべての者たちから憎まれ続けるであろう」(10, 22)という表現もそのような事態の反映と理解することができる²⁸。そうだとすれば、マタイ10章の弟子派遣講話で語られている迫害は、物語の表層では地上のイエスが直弟子たちに語っているのであるが、同時にその深層では福音書記者がイエスの口を通して聴き手であるマタイ共同体の初読者たちの現場に直接語りかけるものとなっている。それは多くの論者が想定しているように、迫害の結果ユダヤ教会堂連合からはじき出され、現在ではもはやイスラエル宣教を断念してしまったマタイ共同体の過去について語るものではなく、現に今イスラエル宣教を遂行しつつあるが故に迫害を受けている共同体の現在について語っているのである²⁹。周知のようにマタイは終末直前の迫害について語っているマコ13, 9-13の素材をこの弟子派遣講話の中に移している(マタ10, 17-22)。また、マタ23, 34の派遣の言葉で派遣の主体を

27 シリアにおけるユダヤ人に対する敵意と迫害についてヨセフス『ユダヤ戦記』1, 88; 2, 461-465; 5, 556; 7, 41-62, 100-111, 363 参照。6世紀前半アンティオキア出身の歴史家マララスは、アンティオキアでカリグラ治世の第3年(39/40年)にユダヤ人迫害が起ったことを伝えている:「アンティオキアのギリシア人たちはその地のユダヤ人たちと市街戦[δημοσικὴν μάχην 民衆的、ないし街区間の(?)戦い]を交わした末、多くのユダヤ人たちを殺し、彼らの諸会堂を焼いた」(Malalas, Chronographia 10, 20: テキストは J. Thurn (ed), Ioannis Malalae Chronographia, Berlin/New York 2000, 185)。

28 さらにマタ 24, 9 参照:「その時人々はあなた方を艱難の中へ引き渡し、あなた方を殺すであろう。そしてあなた方は全ての諸民族によって憎まれ続けるであろう」。

Q11, 49の「神の知恵」ないし神からイエスに替え、「あなた方は彼らのうちの幾人かをあなた方の諸会堂で鞭打ち、そして町から町へ迫害するであろう」という表現で10, 17, 23の派遣の言葉と明確な関連を付けている³⁰。つまり、マタイは10章の弟子たちの宣教に伴う迫害を終末直前の義人の苦難と意味付け、それをまさに今彼の共同体が体験しつつあると主張しているのである。

3) 「建設する」意味での τελείν

第三に、以上の二つの可能性に比べると蓋然性は一段低くなるが、もう一つ10, 23の言葉を有効なものと解釈する可能性がある。エズラ記（七十人訳Ⅱエズラ）ではエルサレム神殿の再建について次のように書かれている：
καὶ ἀπὸ τότε ἕως τοῦ νῦν ὠκοδομήθη καὶ οὐκ ἐτελέσθη (5, 16b) ; καὶ ἐτέλεσαν τὸν οἶκον τοῦτον ἕως ἡμέρας τρίτης μηνὸς Ἀδαρ, ὃ ἐστὶν ἔτος ἕκτον τῇ βασιλείᾳ Δαρείου τοῦ βασιλέως (6, 15)。ネヘミヤ記ではエルサレムの城壁の再建についてこう書かれている：Καὶ ἐτελέσθη τὸ τεῖχος πέμπτη καὶ εἰκάδι τοῦ Εἰλου εἰς πεντήκοντα καὶ δύο ἡμέρας (2Esr 16, 15 [=Neh 6, 15])³¹。もし我々がこの七十人訳の翻訳ギリシア語の用例に従うなら、マタイ 10, 23後半を建築作業の完成と解釈することもできる。イスラエルの復興について語っているテキストでは繰り返しイスラエルの町々の再建と再定住が

29 Garbe, Hirte (上掲注 12) 132-134 と Konrad, Israel (上掲注 12) 91f. は、「マタイがイスラエル伝道が終わったものと看做していない」(Garbe, Hirte 134) 徴としてマタイ 9, 37 f. を挙げている。「大いなる収穫と僅かな働き人との乖離に直面して、収穫の主 (=神) に (さらなる) 働き人の派遣を乞い願うようにとの弟子たちに対する促しは、福音書記者にとって従来と変わらずイスラエル伝道の観点でも、またその観点でこそ有効なのである。この箇所では語られた世界のレベルと福音書記者のコミュニケーションのレベルを区別するなら、[物語の] 受け手たちは、弟子たちがかつて収穫の主の乞い願った働き人の役割の中に自分たち [が置かれていること] を見る事ができるし、見るべきなのである」(Konrad, Israel 92)。

30 マタイ 23, 34 の καὶ ἐξ αὐτῶν μαστιγώσετε ἐν ταῖς συναγωγαῖς ὑμῶν καὶ ἀπὸ πόλεως εἰς πόλιν はルカ版 (11, 49) ではなく、明らかに 10, 17 (καὶ ἐν ταῖς συναγωγαῖς αὐτῶν μαστιγώσουσιν ὑμᾶς) と 10, 23 (διώκωσιν ὑμᾶς ἐν τῇ πόλει ταύτῃ, φεύγετε εἰς τὴν ἑτέραν) の言葉に合わせたマタイの編集である。Konrad, Israel (上掲注 12) 250, Anm. 352 参照。

語られている（アモ9,14；イザ61,4；エレ31,23f.；32,44；エゼ36,10.33.35.38）。捕囚後の再建が何と言っても復興思想の源を形作っている。

他方で、ヨシュア記13-21章ではイスラエル諸部族間の土地の分配が町ごとに行われている³²。そこでひょっとすると、イスラエルの復興を転義的な意味でのその町々の建設として表現することができたかもしれない³³。弟子派遣講話の文脈では、イスラエルの復興を表現するために様々な隠喩が用いられている：失われた羊たち、収穫、そしてひょっとするとさらにそれらに加えて、町々の建設³⁴。

10,23の言葉は建設の比喩を使っているものとする、真正なイエスのものとしては、イスラエルの町々が彼の生前にはまだ破壊されることもなく無事であったのだから、理解し難い。しかし、ユダヤ戦争の後、イスラエルの町々の多くは戦禍のために荒廃しており、復興途上であっただろう。そのような状況の下では建築という象徴言語の使用が説得力を持った可能性がある³⁵。

31 聖書外のギリシア語には τελεῖν が建設作業に用いられる例証はない。エズ 5,16（アラム語）とネヘ 6,15（ヘブライ語）ではマソラ本文に בנין；エズ 6,15（アラム語）では כִּי בִּנְיָן קִרְבָּן（北西セム語からの借入語、ヘブライ語の בִּנְיָן に対応）が立っている。さらに I マカ 13,10 を参照：ἐτάχυνεν τοῦ τελέσαι τὰ τεῖχη Ἱερουσαλὴμ。LSJ は七十人訳の翻訳ギリシア語を完全には取り上げておらず、τελεῖν のこの意味の可能性には触れていない。F. M. J. Waanders, *The History of ΤΕΛΟΣ and ΤΕΛΕΩ in Ancient Greek*, Amsterdam 1983 の特殊研究も同様である。T. Muraoka, *A Greek-English Lexicon of the Septuagint*, Louvain/Paris/Dudley 2002 はまだ七十人訳の全体をカバーするものではなく（五書と十二小預言者）、この意味の可能性に言及していない。Bauer⁶ s.v. τελέω 1. は次のように記している：「受動態 終えられる、完成される、塔の建設について（2Esr 5,16. 16,15 参照）H 12,1 f. 13,5. 17,5. 82,1. 87,2（τὸ ἔργον）」。さらに J. Lust/E. Eynikel/K. Hauspie, *Greek-English Lexicon of the Septuagint*, Stuttgart²2003, s.v. τελέω を参照：「受動態：完成される エズ 5,16」。

32 オバ 17-21、特に 20 節；ゼカ 1,17 参照（いずれもイスラエルの復興の文脈）。

33 ヘルマス幻 III 4,1 f.；5,5；9,5；譬 IX 5,1；[10,2] 参照（転義的に教会の意味での「塔」の建設についての幻の言語（幻 III 3,3 参照））。

34 人の子の建設活動については 16,19 を比較することができる。すなわち、人の子イエスは彼の教会を「建てる」であろう。さらに神殿の言葉が比較できる。彼は神殿を破壊し、そして三日のうちに「建てる」であろう（26,61；27,40）。

35 捕囚の後の離散と類比させると、ユダヤ戦争の後にいわば第二の離散の出来事が起っているのである。

つまり、「イスラエルの町々」という表現を文法的に最も単純に動詞 **τελέσητε** の目的語と取り、しかもイスラエルの終末論的な復興のための再建設の意味に解釈するならば、10,23の発言は「イスラエル」の語の狭義の地理的な意味を保持したままで、ユダヤ戦争後の教会にも妥当し続けるものとなるのである。

ただし、この第三の解釈の可能性は、ユダヤ戦争で荒廃したのはパレスティナの町々であって、シリアの町々ではないので、マタイ以前のパレスティナで宣教がなされていた段階にはよく当てはまるが、すでにそこを去ってシリアで宣教活動が続けているマタイの共同体には整合的ではない。その意味でこの解釈は、第一、第二のものと比べると、蓋然性が一段低くなると言わざるを得ない。

III

以上のように、10,23の言葉をマタイ共同体の状況に当てはまるものと解釈する可能性として、1) 任務を完成するのは人の子であること、2) 理念的な「大イスラエル」はシリアを含むこと、という二つ（さらに蓋然性はやや劣るが3) 「建設する」意味での **τελεῖν**）がある。我々はおそらくこの二つの可能性を同時に成り立つものと考えるべきであろう。すなわち、マタイ共同体から派遣される弟子たちは、大イスラエルの復興のためにシリアの地域で宣教を続けるのであるが、たとえあの町、この町で迫害にあって、そこから逃げ出さなければならぬとしても、意気消沈する必要はない。なぜなら、終わりの時に人の子が到来して、イスラエルの復興を完成してくれるからである。その意味で、この言葉は終末論的な慰めの言葉であり、同時に、倦むことなく宣教し続けるように、との勧告の言葉である。